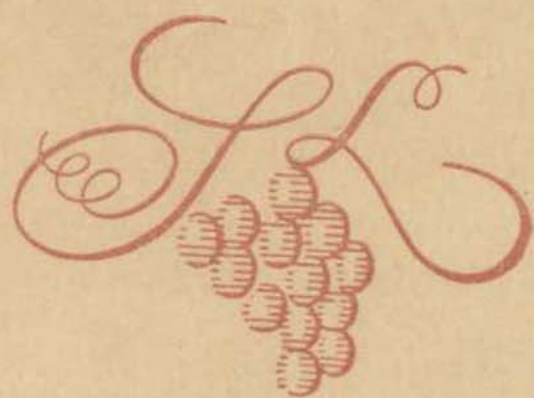


新潮文庫

愛ってなに？

山口 瞳 著



新潮社

あい
愛ってなに？

定価 320 円

新潮文庫 草 111 F

昭和五十二年三月三十日 発行
昭和五十四年一月十日 六刷

著者

山

口

瞳

発行者

佐藤 亮一

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・塚田印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Hitomi Yamaguchi 1977 Printed in Japan

新 潮 文 庫

愛 っ て な に ？

山 口 瞳 著



新 潮 社 版

2394

目次

罐蹴り	七
D型の月	二九
愛ってなに？	五三
首飾り	七七
ホテル	一〇一
風船	一二三
鳩胸の鳩	一三七
子供の顔	一四九
率爾ながら	一七三

翡翠の色	二二五
背後の声	二四一
ホテルの匂い	二五五
赤い部屋	二七一
月曜日まで	二八七
葛の花	三三五

解説 岩橋邦枝

愛
っ
て
な
に
？

罐^{かん}

蹴^け

り

1

岩崎が目をさますと、台所で何かを刻んでいるような調子のよい音が聞えていた。その音で目がさめたのかもしれない。

時計をみると八時前である。めずらしく、そのまま起きて階下へおりていった。

「おはようございます」

女中の政子はびっくりしたような顔で庖丁ほうちようを置き、前掛けで手を拭いた。台所でも食事ができるようになっていた。息子の宏ひろしはそこで食事をして、もう出かけてしまっている。

「あなたはいつも何時に起きるの」

「あら、お二階へきこえるんですか、わたしの起きるのが」

「いや、そうじゃない。そういう意味で言ってるんじゃない」

「六時です」

「六時？」

「いったん六時に起きるんです。六時に起きてガスに火を点けて、また寝るんです。ほんとうに起きるのは六時半頃ですわ。そうするとお湯も沸いていますし、ご飯もたけていますから。……それから、お坊ちゃんをお起しするんです」

「どうも、そうらしいね」

「あの、やっぱり、目覚し時計の音がきこえるんですか」

「一度だけだ。一度だけきこえたことがある。それがずいぶん早い時間のように思われたもんだから」

「申しわけありません」

「そんなに早く起きなくちゃいけないのかね」

「え？」

「わるいと思っているんだ。私が遅くまで起きているから……」

「でも、十二時にはやすませていただくようにしていますから」

「それだって、六時間しか寝られない」

「平気です。昼間はなにもすることがありませんから、体は楽なんです」

お茶を淹^いれて、政子も椅子に腰をおろした。その時間になると、この家は岩崎と政子の二人きりになってしまう。岩崎が妻と別れてから、ずっとそういう生活が続いている。

政子は女中としては五人目か六人目になる。

はじめ、岩崎は、家族は自分と息子の二人きりだし、息子も小学校へ行っていて手がからなから、女中の来^き手はいくらでもあると思っていた。また、相場より五千円くらいは余分に給料を払うつもりでいた。

ところが、女中を雇うには、それが一番悪い条件であることが、だんだんにわかってきた。妻

と別れた男で、相応の収入があり、いくらかは世間に名を知られているということだけで、仲介者はむずかしそうな顔をした。男の子が一人だけというのも悪いほうの条件にはいっていた。

家は、二階が書斎と寝室で、階下が客間と茶の間と子供部屋である。客間を宏の部屋に改造し、台所の隣の子供部屋だったところを女中の部屋にした。壁紙を女の部屋らしく貼りかえ、ベッドを買い、古いほうのテレビを置いて、それを周旋人に見てもらったりもした。

田舎に家のある友人に頼んだり、地方に講演に行ったときは、主催社に事情を話したりして、何人かの娘に来てもらったが、どれも長続きがしなかった。三カ月か四カ月で故郷へ帰ってしまふ。

夜おそく、廊下で会ったりすると、女中がビクツとして体を固くするのがわかる。また、女中が風呂にはいつているときに、岩崎が二階からおりていくと、水音が止んで、なかで様子をうかがっている気配がわかったりすることがある。これでは岩崎のほうもたまらない。

女中が居つかないのは、そのせいばかりではない。岩崎の帰宅が遅くなるのも困ることである。らしかった。宏と二人きりでは、若い娘は怖ろおそしいのである。淋しいのである。

あまり大家族で子供が大勢いても嫌われるし、女中を雇うといっても、そこところがむずかしい。

女中が居なくなると、間を家政婦や、遠縁にあたる老婦人でつないだりしていたが、旅行の多い岩崎にとっては、やはりきまったひとでないと不便である。

政子だけが、うまいぐあいに長続きしそうだった。誕生日が来ると三十歳になるそうで、一度

結婚に失敗している。性格がさばさばしているところがよかった。宏も、すぐになつて我儘を言えるようになっていゝらしい。別れた妻が行っていた美容院のマダムの紹介である。

「しかし、そんなに早く起きなくちゃいけないのかね」

岩崎としては食事の世話と留守番役さえしてくれればいいという心算である。その気があれば、洋裁でも、割烹でも、月謝はこちらでもつから習いにいったらどうかと言つてある。

「お坊ちゃまが、七時十五分頃にお出かけになりますから」

宏は中学の二年生になっていた。最近は自転車で通学している。岩崎としては、ここを売り払つて都心のマンションに移ったほうが便利なのであるが、それが出来ないのは宏の学校のためである。小学校から高校まで続いていて、転校することなど考えたこともないらしい。その点に関しては岩崎も弱気になっていた。これ以上、子供にショックをあたえてはいけない。それに、宏は気管支がわるくて、都心に住むことも遠距離通学も医者から禁じられていた。

「おかしいなあ。学校まで自転車で十分もかからないだろう」

「そのくらいだとおっしゃってました」

「いま、何時はじまり？」

「八時半からだそうです」

「そうすると、七時半に学校へ着いたとして、はじまるまで一時間あるわけだね」

「そうなんです」

「変なやつだなあ」

「あの、旦那さま。コーヒーをいれましょうか」

「旦那さまはよしてくれよ」

「それとも、お食事になさいますか」

「うん」

「卵はどうなさいます」

「ベーコンがあったら、ベーコン・エッグ」

「お坊ちゃまはスクランブルなんですよ。わたし、はじめはわからなくて教えていただいたんです」

政子は立ちあがって後ろむきになった。

「このごろ、推理小説なんか読んでるから、それで憶えたんだろう。……なんだ、それならパン食のときもあるの？」

「いいえ。お坊ちゃまは、必ず御飯で、おみおつけを召しあがります。卵だけスクランブルなんです。だから、わたし、六時に起きるんですよ」

「ああ、そうそう。その授業がはじまるまでの一時間、宏は何をしてるのかね」

「かんけ罐蹴りですって」

「カンケリ？」

「どのクラスにも必ず一人か二人はいるそうですね、一時間前に登校する生徒が」

「ふうん」

それはそういうものかもしれないと思った。

「おもしろいもんですね」

「それがみんな罐蹴りをやっているのかね」

「そうじゃないらしいんです。たいがいは教室で本を読んでいたり、キャッチ・ボールをしたり……」

「宏は一人で罐蹴りをやっているのかね」

「そうらしいですね。昼休みになると大勢でやることもあるとおっしゃってましたが」

「そうするとサッカーみたいなものなんだろうか。罐を蹴って行って、敵の陣地に入れるような……」

「違います。空罐をただ蹴るだけです」

「それで、おもしろいのかね」

「もう面白くて仕方がないそうですわ」

コーヒートパンとバターと卵が卓のうえにならび、政子はまた椅子に坐った。下をむいていたせいか、^{まぶた}瞼のあたりに赤味がさしている。

「わからないねえ。……昔、石蹴りなんていうのがあったけれど、あれにはルールがあったはずだけれど」

「罐蹴りにルールなんかありませんわ」

政子は、自分のコーヒーを飲んだ。

すると、いま、宏は校庭で一人で罐蹴りをやっているところかもしれない。

岩崎はそう言われてみて、道で罐蹴りをやっている少女を見たことがあったのを思いだした。

少女は母親と一緒に買物にでも行く途中らしい。空罐は気持よく前方へころがってゆくこともあるし、道路わきにそれることもあった。また空振りして動かないこともあった。そのときは、もとの位置までもどって蹴りなおす。母親に注意されても、なかなかやめようとしない。小学二年生ぐらいの女児である。

また、最終レースが終って人影のすくなくなった競馬場で、あきずにそれを繰り返している少女を見たこともある。おそらく、両親は、そうやって電車が空^すくのを待っているのだろう。競馬場にはビールやジュースの空罐がいくところもころがっている。罐は蹴るたびにカラカラという音をたてた。

そうだとすると、罐蹴りは、小学校の女生徒の間で流行しているのかもしれない。そのほうがびったりするような遊びである。罐蹴りの好きな宏が一時間前に登校するのはそのせいかもしれない。ただし、いくら体が弱くても中学二年生の宏の蹴る罐は、もっとずっと遠くまで飛ぶだろうが――。

「ですから、運動靴がいたむんですよ。お坊ちゃまのは、右の爪先が破れているんですが、それでもいいんですって」

「そういう齡頃なんだよ」

「とても学校が好きなんです。学校にいと楽しくてしょうがないそうです。この頃は、お帰りが八時過ぎなんです」

「何をしているんだろう」

「さあ。クラブ活動でしょう」

「どの部にもはいってはいはずなんだけれど」

中学に入学したとき、ワンダー・フォーゲルならいいのではないかと相談されたことがあったが、そこも訓練がきびしいと知って自分であきらめてしまった。

「ほかの生徒のクラブ活動を見て廻っているらしいんです」

「いやな奴だな」

「違いますわ。人気があるらしいですよ。どこの部室へもはいって行って遊んでいらっしゃるんですって。どうして学校というのは二十四時間いさせてくれないのかなあなんておっしゃってましたわ」

「あなたには何でも言うんですね」

「晩めっこ同好会なんていうのもあるらしいんです」

「ニラメッコ？」

岩崎と政子の目があって、政子はかすかに笑った。

「それに、ユビ相撲研究会」

「へええ」